官版

語彙

巻七

ホ 2
4706
7

門ホ2
號 4706
帙 7

明治十四年五月

語彙

伊之部

文部省編輯局

東京帝國大學圖書之印

明治文庫
號外
巻

語彙巻七

伊部二

いた

林の薄く解こけたるものをいふ

いた 和板 伊太加 波多板 歩板 式盤 薄木也

板敷 板の上ゐ居て

いた 甚といふ意なるべしといふあるべし 万十三 この長月のもゝだのあくをと伊多もとゝのこゑあく

たまの月のかたれば 又玉 ゆこゝぎこゝぎもあひたるあり

あけゐのがすけばあがりふこゝろ伊多もとゝのこゑあく

いだ 畿内西國俗 多もとゝのこゑあく

魚名、さいの下ゐ

いたい 音○らてい 注也

異風とあるべし人あをなすゝぬとゝぐこの者をいふ 運歩 異體 タイ

いたいけ 勞ハゝき氣なるとゝをきものゝ形狀を

ちひさゝこといたいけ いふ 辨内侍日記 かゝらけゝもとといふ木の

しゝたるを

いたゝぐさ 俗
草名、いゝらさの
下ホ注モ

いたゝゝい 俗
勞々しきまて カイサウ と
いゝふホ同ト

いだう 音
醫者の學ぶ道をいゝふ
慶節 醫道

いたか
見えも見えぬもよるめぐるいたゝの
經の月のそゝよみ
經をよむ塔婆を書川ホ流しゝ功德を讃し
錢をもふ僧あり 七十番職人歌合 文字ハ

いたがき
板の垣あり 源 蓬生 のたゝぎきといふ物
うちかゝめつゝろもせ給ふ

いたがもと 俗
酒糟の板形ホあるたる
ものをいふ

いたがひ
飼御馬各三疋簡幣馬内恒令養飼自外馬皆放神牧
調列櫪飼御馬八十疋國飼三十一疋
左右馬寮式 早朝
太神宮式 凡二所太神宮櫪

いたがひ 俗
介名、ゝとゞひの
下ホ注モ

いたかふる ヘフルフル
ダキカヘル といふあり 竹 かゝや姫を
のがゝへとゝり

いたき クシキ
刀杖あゝどホ觸て身のあやむをいひ又血の
頭腦をつ犯宿食の腸胃を苦しむる類
もゝべと外物ホ侵さるをあやまり
ふゝ苦しゝ思ふをいふあり 万五 痛伎 ホ
和 痛伊太之 盛衰サ三 むらをもつてうちけれども
かゝとをうつのれうゝを 万代集サ こゝをいたをつめる若菜の
ゝ思ふ松をたゝめゝホひうぎゝあやい

いたき クシキ
事物ホ感じて心の痛むをいふあり 万二 霞
らを打きもの心を痛ぬえをこゝ
たゝ長きえる日のうゝをホけるをゝ
つ祈ゝのをとうつあをと痛情ハあぬびう祈つも
痛情ハあぬびう祈つも

いたき クシキ
物車の甚しきをいふ 万十五 うかをゝふうき
あゝふゝホ又九 孫せんとうおきうゝせ伊多々おふ犯をいふ
ものをとゝとのひをこゝいのたゝ
ある痛がやつこ 古今雜上 かゝをふをびとゝゝぬ
いのたゝ老をゝホける

いたき クシキ
上手ホ物しゝ給ひけるをとゝあ
けれ 散木上 いのため山のゝやちゝも
アカイサウナモノヂヤ の意あり 源 御幸 古代ある
御文うきをのれどいたゝゝや此御手よむゝし
ホヒへをあゝしゝあのゆくものホこをあり
ゝもあゝるれが木々のゝ祈しゝを色うそうゆく

いたき クシキ

心ホ感ドして ホメル こと又 キツイモノヂヤ の意あり

源野分 うちあゝえだめるもぐたふこうちぐ引

かゝづきたる家いとのたゝ 又若紫 かの國のさゝぐの守あがりちの娘

こぎあれとうゝ多ゝそ 増鏡 いすゝへのことあり給へるこそいたき

の給ふふ

いたきぬゝ

キツイ人ヂヤ の意すてゆめていふあり 源蓬葉

いたきぬゝ あゝぐたのおもむたい耳とゞめ給ひつや

うゝのや

いたきもの

もぐまてよきこあり コレハキツイ キツイモノヂヤ あど

きゝものゝ いふぐごとゝ 源蜻蛉 此宮も年ごろのといた

給ひて

いだく カキクケ

物を カヘル をいふあり

○抱

他ホ物を カヘサセル を

いだくさる セスルスレ

いふあり

同上

いだくゝむる メムムメル

他ホ物を カヘラレル を

いふあり

宇俊蘆 いだくうゝ ゝておや ゝありやいぐ ゝふゝとらゝ 大和 もたるあげあ

き女いとそう ゝげある子をいだきてうどのもとホたてう 源名負 此人をえい

だき給ふゝ けもぐ 又浮舟 つとう紀ていだられたるものとらうたゝ ゝとか

ぐもと 枕三 物いそぬ児のそうらうぐへうて入ゆものだうもぐもぐあきたる 又六 つ

きゝ ゝきものこホさうぞゝ ゝとう ゝたる餌袋いだうせて 又いつゝと

いぐたとう 給ひてひざよせ給へるいとうゝ

いだく カキクケ

心のうちホこめもちてあるをいふあり

屏深懐 斬恨 神代紀下 則化爲心梁大鰐而知天孫視其私

いたけき クシキ

いたとさと同ゝそだゝきをいふなり

苦のひホけよりせぐゝあゝけゝ 万十七 伊多家苦のひホけホきる 又伊多家

こゝホおもひで

いたゞゝ

○きゞゝ ○む糸たゞ 腰輿あり三方板すて張前ホ簾を

○む糸あけ ○きそうゞ かゝ制作張輿ホうそう事ゝ

海人藻芥 駕柄輿是者田舍等用之當時板輿と云者也 建内記 永享十二年二月十一日

春日祭也予爲上卿依早旦進發先行者也内々用板輿近例也 元長卿記 永正五年二月

廿八日今日春日祭也云云
着束帯乗板輿

いたこんぐうこんぐう 音

方ある草履のうらゐ板を着たるをいふ
七十一番職人歌合 いたこんぐうめせ
虫名、ようひ〳〵むしの
下ゐ注也

いたこむ 四國 俗

五節の時うたふ歌あり 辨内侍日記 おの〳〵
たちそまひ給ふ云云右兵衛督有資いだ〳〵
歌い猶ようてこそとて辨内侍琴の
音の心ひくもの柏木のそゐ吹風の聲ぞ身ゐしむ

いたうた

袿い衣のうへ直衣などの下ゐ着るものすて
うちるやうゐのだ〳〵ときるものあり 枕一

いだ〳〵うちだ

櫻のあわ〳〵ふのだ〳〵うちだ〳〵と 今昔廿八
指貫と着 桃藻 出袿有憚之時畧之 殿上人藏人の出〳〵袿と織物の
但衣單籠着

いたゝかゆ〳〵 俗

爲てる善い惡うとのふことゞるて癢を掻が
痛〳〵いたゝとて掻ゐるゆ〳〵如何せん

といふ意
あり

いたゞき

畳とあうぐる板の間あり 江次五 鋪延道於
講道四面板敷上 禁秘御抄 殿上小板敷伊

あやとうあるいたゞ〳〵きゐ月のうたぶ〳〵まぐふせうと 又いたゞ〳〵きの あ〳〵ゐ
そひおりきて 枕一 戸口のまへあるあるものたゞきゐ給ひて
下ゐ着たる衣の見ゆるもゝゐ出〳〵て着る
あり 深窓秘抄 出衣又打衣あり

いだ〳〵ぐるま

儀式の節出〳〵並て飾りたる車とのふ 源 神
八省ゐたてつゞけたるのだ〳〵ぐるゐのぐるま
袖ぶち色あひ〳〵もめるまこぬさまゐ
寺の修正の御幸院の御方のいだ〳〵ぐるゐ参りたり〳〵ぐ

いだ〳〵づゆ

衣服のつまをのたまをなり出〳〵衣ゐ同下
寺の大將さ孫ゐとを〳〵めて上達部の
いだ〳〵づゆのまうたゞどもめまとまりて
辨内侍日記 殿上の獅ゲたある間ゆゐ德太

いたゞゝこと

板まて造まる部あり外ようり見まそうされぬ
やうゐうゐ〳〵あゐふ物なり 金葉 意下 逢ことゝ
たちろ〳〵やどの板ゝゝとゝやぶ
せゲゐうけて〳〵のへぬゝむ 散木中 風ふけば
ぶまゐけゝゐ〳〵のぶて〳〵ろ

いだ〳〵ぬゝる〳〵

出〳〵ぬゝるゝすて心ゆるゝ〳〵たるゐどゐ他ゐ
まゝくさやゝこちたうげまどもつひま
いだ〳〵ぬゝまゐけゝ
うちこさるゝをのふゐり 千訓六 そ〳〵めいゆ〳〵

いたじめ（俗）

縮緬太織絹の類を板にてしめ
模様を染さるものなり

いたまセ サシスセ

心ざしを到らせるまてこころをつくせを
いふなり 伊 心ざしをいたしけもどさる
今昔四 何況や人誠の心を至して法華經を聞き奉りて

いたまセ サシスセ

到せまいでく爲るとのふ意なり 續紀卅
終に罪己も同々致都宇拾二下 禍の無
禮をいたせるとふ立所ふ罪せさせおもしまを 又四 禮節をいい
候をでぶをいたせふ候

いだまセ サシスセ

此方より物を出せを
いふなり

いだきまセる セスルレ

他をして物を イダサセル を
いふなり

いだきまもる メムルレ

同上

いだきまる レルルレ

他ふ物を イダサル を
いふなり

いだきまる レルルレ

我がおのづから物の イダサル を
いふなり

いだせる ラリルレ

物をのだしてあるを
いふなり

枕四 奥のかたようをのださもたるんうろこを外ふさる人やしとも えあもふ
まゝけも 又五 宮の五節のさせ給ふ 又八 露い別まの涙あるべしとのふ事を
頭の中将打のぞき給へもど 伊 女うたより出せ盃のさらふ歌をかきて 又 忘
草を忍草とやいふとてのだきさせ給へりけもど 土佐 船をのだしてこぎゆく
源 梅枝 辨少將柏子とりて梅が枝のだしてうるわどとて
唐物語 とゝうるとゝとゝるもして船をのださむずでしく

いたぐま

山の最上の處を云 和 巔 和名抄 太太木 山頂也 竹 駿河の
國ふあるる山のいたぐまふもてあくべまよく

いたぐま ○いるぐま記

頭上をいふ アタマノテッペン なり 和 顛 伊太岐 頂也
宇藤原君 白きいたぐまの上まを奉りとのた

だきふいたくき奉らん 源 若菜下 御いたくきまるく たりしたくくて
堀川院百首 年ふもどるぐいたくもふおく霜を草葉の上と思ひけるるを

いたぐき

物の最上の所をのふ テッペン なり 枕十 火桶引
炭を重猶おきたるいたぐきを火ふ火
おきたるぶむいたく
よせたるふ云々皆火をわるぐまのふやしと

いたぐき（俗）○もおらをもち
○もおらきもち

圓扁ある糕を四めて中ふ小豆餡を載たる
もの四月八日灌佛會ふ供まを

いたぐきまつる　ヲリルル

タイセツニ神を祭るものひ又タイセツニ仕へまつるをいふなり後拾神祇おわがちちうまごたちの三代まで和いたぐきまつる是ぐ〜おわん神散木中きさ〜だの初申ゐまやうまだ山峯とよむまでいたぐきまつる

いたぐきもち　ひ

御いたぐきもちひおどきてまつるきまで、いひきこえさせ給ふ又布引中宮ゆゑ男宮女宮御いたぐきもちひのわどのどいとめでたし〜桃藻小兒戴餅事云云

關白被示氣色余置笏起取餅令戴若君頭上三度

いたぐきもつ　タチツテ

高くさ〜上て持つといふなり神宮雜例集物忌ホ定令眷炊戴持神主御前追天

いたぐきもつ　タチツテ

頭のうへふのたぐきもつといふより出て崇敬はもつる詞なり又タイセツ忘エルをもいふ續紀十五

斯玉ホ學志頂令薇豆又祖名乎戴持而

万五大勅旨戴持豆

いたぐく　カキクケ

頭のうへふ物をのせるを

いふなり

他を〜て物をイタダカセルを

いたぐかせる　セススレ

いふなり

同上

いたぐかむる　メムムレ

万サあもとでも玉ゐるがりや伊多太伎豆ろうらのなうふあへまつるも

紫式部日記いたぐきもちひ云云東のとゐむろひて上のいたぐうせ奉らせ給ふなり

夫十六のことりあと霜とのいたぐく翁草冬の野守とゐりやしぬ〜ん

宇拾十三さてこと魚あどあたるめて桶ゐいもそ女どもゐのたぐうせてこそ

房ゐへり

たゐべ

いたぐく　俗カキクケ

人ゐ物を愛ふを

いふ

東京俗

事を爲揃ふを

いふ

いたぐくる　ケクルル

物をイタダカセルをいふなり發心集中そこを

けるありその輪を童女ゐ

いたぐけて去ぬ

いたぐそのうま

板飼の馬と同〜類なるべ〜等由氣宮儀式帳

常板立御馬二疋此率己戸人夫

御馬飼内人云云任日後家雜罪事祓清豆

并多氣郡司貢上丁飼に仕奉ル

いたち。よたち

まして、能狭き際を穿ち入て、鳥鼠を捕ふ 宇園議上 いたちのあれまの鼠い
しもつくゝゆゝろもてゝてゝるゝん 源手習 この君のふゝ給へるをあやゝゝうとい
ちとろいゝふゝある物ゝさる
ゐざさもる 和 鼬鼠 和名抄 以知

形鼠ゝ似て大ゝ、身長く尾大あり、黄赤微黒すゝて頭短ゝ口邊黒と帯ふ其身柔輭

いたちあざさを 俗 ○きゝあざさを ○ちろあざさを

草名、山中ゝ生ずる平江帯類の草すゝて、其葉の形稍菊ゝ似ゝり、莖高一二尺、秋梢上ゝ枝を分て多くの花を開く淡紫色ちり

いたちうを 俗 ○あふゝあ ○ゐまだら ○ゐまだら

魚名、細鱗光あり、色鼬鼠ゝ似り頭扁く身圓く尾ゝ岐すゝ、味大口魚ゝ似ゝり、故ゝ又ゝゝまだら、ゐゆまだら等の名あり

いたちぐさ

草名、のたちさぜの下ゝ注ず

いたちぐさ 俗

本和連翹 和名抄 知久佐 草名、たゝゝさぶらうの下ゝ注ず

いたちぐも 俗

夏の雲をいふ 物称 夏雲加賀ゆゝ
のたち雲といふ

いたちごろこ 俗

まゝるをゝ
いふ

いたちさゝげ 俗 ○ちんどうさう ○やまのちんどう

豌豆ゝ似たる宿根草すゝて春萌生ず葉蚕豆ゝ似て薄く末ゝ細き鬚あり、其葉互生ず、花ゝ小豆花の如く穂をなすも、初淡黄茶褐色ゝ変ず莢と結ふゝと長き一寸餘 ○ 注ず決明

いたちのあゝ 伊勢 俗 ○おゐぜり ○きろ絲のそう

毛蕊の一種あり、葉秋牡丹の如くゝゆゝゝて毛すゝ、花石竜芮ゝ似て五瓣或ゝ七八瓣ゝ至る、

○田々蒜

いたちのけさうへゝ 俗

木名がゆまゝその
下ゝ注ず

いたちのひとゝもとぐさ 佐渡 俗

草名たゝゝさぶらうの
下ゝ注ず

いたちのやゝげ

鼬のゝゝげさゝと
いふ事也

鼬の目の上ゝ手をかゞゝて遠くゝゝるを
いふ 孟津抄 尼公の手習君をゝるとのすう

二人互ゝ手背を攘あひて、つゝゝゝゝ同ゝ事ゝる戯すゝ、轉ゝて相互ゝ同ゝ事を

いたちはぜ　かえ　○かりのえ　○さんちゃ

木名、土牛膝葉に似て毛多く両對也　冬月葉落て春分前後花開く、一苞數花を出し、小まるて四瓣の長蕋あり、黄色三分許、後實を結ぶ、形あるものごとし　本和山茱萸一名以多知波之加美一名加利波乃美

いたちはぜ

草名、そのもの下に注也　散木下　うきゝ稿ゆゑいたちもどしとそゝのけり　稿也もちの木よりてろ〳〵て　きけ

いたちはぜ　○いたちぐさ　○もんけう

小木なり、特立の者垂條の者あり、垂條を　タニワタシ　といふ　春初葉の先て花を開く、四瓣黄色葉形搗ゆゑて尖り鋸歯あり三葉或五葉節に對して生也、實椿實の如くゆゑて中分二つに裂く、實を藥用とする　本和連翹一名以多知波世一名以多知久佐

いたちはぜこ　俗

木名、あるにあらず　下に注也

いたり　音

以、已通し用ゐたるゆて佛家四度化行の終りたる僧をいふ　慶節　以遠

いたりがはき　シ

人此樂をとゝまられていたづらはしく外のたのしみをもとめ　白氏文集十九　頌

オホクホネラルサマをいふなり　欽明紀　且速遷之莫煩飾語　田令　不勞言上　徒然草　あるゝある

いたつき

射術を學ぶ箭の鏃をいふ轉じて其鏃をつけたる箭の名也　和平題箭一名以太都岐

いたつき

このあぢたるあさ身のいたつき煩の事あり　藻十六　病のいたつき

いたつきいる　レルルルルレ

ものこのようくろやせくてあそ　ものさせんとあんきこゆる

いたづきされ　俗

小板を　いふ

いたづく　カキクケ

深切ニセワヲスル　又稿んごろに　カイガル　ともいふなり　伊常の使よりの此人よくのたまもとしひやもうけもんごろふのたづきけり　源相壺　御心ふつゝべき御あそびそ〳〵おふあ〳〵おや〳〵いたづく　又續命　あそれあらせもの〳〵ろびのくふく〳〵かひありておや〳〵いたづくもの　又浮舟　さるゝうらへの思ひいたづき聞えさせ給ふやの

いたつけ　俗

長さ五六分の鉾薄板を付るゝ用ゐる故ゆいふ

いたつけざうり㊗ 草履の裏に板を着たるにて泥土の道を
行に用ゐるものなり

いたづぱう㊗ 木名、いぬびはの
下に注せ

ムダ 不用 なと云意なり 万二 たをやめの袖吹か
いたづら へすをあすか風みやこを遠み無用にふく 古今序
なにゝける女をとこていたづらに心を動さゞらし 又 俳佪 なゆとして
身のいたづらに老ぬらん年の思をむ事ぞやさしき
死ぬる事を云 伊 そこにいたづらになりに
いたづら けり 古今恋二 夏虫の身をいたづらになす事も
ひとゝろおもひによりてなりけり 拾遺恋五 あはれともいふべき人は
おもほえで身のいたづらになりぬべきかな

いたづら㊗ 用もなく徒にせる戯なとをいふ
転じて私奔をもいふ

いたづらの孫 いたづら孫におなじ 後撰恋四 秋の田のかり
そめぶしもしてけるかいたづらの孫を
なずらへつま
よし

いたづらこ㊗ いたづらものに同じ徒事を
せる小児をいふ

いたづらごと 徒言(イタヅラゴト)なり 散木下 なするをとの松のつまぐしと
いたづらごとゝうきうつめて 拾遺愚草員外
あひの後のいたづらごと書つけて 小嶋口號 當座のいたづらごと
そらるしうて 又 かゝるいたづらごとをのみおもひつゞけて

いたづらじに 死ぬべきやどのことをもあたら無用に死るを
いたづらじに
せよかし いふ 今昔廿七 亦嗽そまてるが何の不死にまき

いたづら孫 ○いたづらの孫 ○いたづらぶし 戀まさる人の獨寝するをいふ 兼盛集 女のもと
にゆかりそていたづら孫てかへりければ逢事の
なきいたづら孫ゆもなすりにけるかな 伊勢大輔集 人ま
おきつゝ歸るよのなくいいたづら孫ゆもなすりぬべきかな

いたづらびと 漂落して身を徒にしたる人をいふ 宇俊蔭
ちてなすきつゝもいたづら人となりぬべくて
なん 源明石 かゝる人を物し給ふこといかのきこえあのぐらのいたづら人
をかせしき物にこそ思ひきて給ふらめと

いたづらびと 不用の人をいふ 源槇柱 かのきこうじさいとこそも
かくてもいたづら人とこそえ給へど

いたづらぶし いたづら孫におなじ 拾遺恋三 いかなりし
時かも竹の一夜だにいたづらぶしをとゞる

しとい〻ふ〻ん 源帰来 君いとけなくしてもゆ〻しきたゆたそ
いたづ〻ぶ〻しとあ〻ひさる〻ふ

いたづらもの

萬代集 雜六 ひ〻人もあ〻てやさしとぬるゝたまゆの
いたづ〻ものいとゝ身あり けり

無用者なり 源氏物語 露だにうたがはしきあだ心あらはしたづ〻しものゆ〻しとふ〻たまと〻を

いたづらもの俗

粗暴驕恣ふ〻しと制せらるゝを聞ぬものあり
又淫奔なる女をいふ

俗間ゆていふ

鼠の異名

いたづらもの俗

敵とたゝうひて痛く手負たるをいふ深手
といふごとし 記中 向日而戰不良故負賊

いたで

奴之痛手 又 伊奢阿藝布流玖麻賀伊多豆流波受波、近本杼理能阿布美
能宇美迩、加豆岐勢那和 神功紀 于知能阿曾餓句夫苑智能伊多氐於破孺
破珥倍廼利能、
伊豆岐齊奈

いたど

板の戸なり 記上 遠登賣能那須夜伊多弖
遠 万十 奥山の真木の板戸をあ〻ひ〻き
〻ものゝ出こゝ孫後い
あふ〻せん

いたどり

○たゝひ○さゝこつまの○ふたばるみち○さゝ〻ろ○ゐつた○さゝ〻ほい
○さゝ〻つぼ○だんご○ほうんぼう○だいたん○さゝど○かいたけ
○やまのたけ
○さまたどり

宿根より生ず葉形圓長すして一尖あり夏月葉間ふ
穂をあ〻して小花攢り開く紅白二種あり實三角すして
薄き翅あり ○ 虎杖 反正紀 多遲花落有于井因爲太子名也多遲花者今
虎杖花也 枕八 いたどりいやしてあり虎の杖とかゝたるところつゐ〻〻〻
あり〻ぬべきさゝ〻ろ〻〻〻を
本和 虎杖根 和名以多止利

いたなゝく 加キクケ

甚く泣とのふ 記下 阿麻陀牟加流乃袁登
賣伊多那加婆比登斯理奴倍志波佐能夜

麻能波手能斯多
那岐尓那久、

いたのぎく俗

草名、ゆろむ〻さうの
下ふ注せ

いたのま俗 ゐ〻ま

板を貼て疊を敷ぬ處又上板〻〻
開闢せざる處をいふ

いたのもの

板を心ふ入もたゝこたるあり物をいふ
巻物ふ對し たる名なり 簧中備忘抄 板の
ものゝ羽二重を板のものと称し たるふ
當時い繻子、綾、紗綾あゝを板のものといふ

いたはしき　シシシ

大事ふおもひて心のあらるさまをいふ又深切ニカハ[ル]ともいふ源貧まことにとおもたづきもいとなむ身もいたはしくかたとけなくおもほゆるもけだしくこころゆくきさまをたゞ給へる又橋姫見るめもてなしいたはしくやんごとなきたさまにいとまさくふ思ひ聞え給へと狭一雨風のあらるさゆるも月日の光のさやうあるゆもあたり給ふもとばのいたはしくやうきものふもひ聞え給ひつ

いたはしき　シシシ

病ふとりて身のいたむ又心のいつくむさまをいふなり万五あのゞ身し伊多波斯計禮婆たもとうあはとうあきて狭二我身はそうしいたはしう成ふたるもとこのたのもしく人やいとをてあしまてんとまとうむ續世繼一かふうへてまありようぬことふあらるもと

いたはしき　シシシ

勞はるさまをいふなり續紀三朕乎肋奉仕奉事乃重支勞支事乎所念坐御意坐依而いたはしうの體言ゆてあまとうの意あり

いたはり

源朝臣奏し給ふ事のあらぬいあうりしらば此御いたはりふからぬ人あしく御徳をよろこばぬやいありし又櫻標めのとあるもありがたうこふやうなる御いたはりのあと淺らしき

いたはり

人のつきしく縁たづ絲て云々あまのいたはりあるもとうあるもとうせそ

いたはりあり　ラリルレ

七重ゆしもあどろかす絲給ひぎしあるんぶんの事そぎたるさふあしことうふうあしくあぶりさまそ

いたはる　ラリルレ

とうの給ふ云云其わとのいたはりてさぶしいせんとの給へが源手習かうふりてあ藏人ふあしくとぶ御つうさのそうふうあしくあどしていたはり給ふ

いたはる　ラリルレ

勞はるる又タイセツニスルをいふなり

いたはらる　レルルレルレ

他ふイタハラレルをいふなり

文實七前好發初繕世賜不宮波去閏四月ふ作刹畢奴此申須中國議上のぎうるの所ふかくびやうのたらくんとのたまひて伊常の使よりい此人よくいた

いたはり

功勞をいふなり又緊切ふ心を用るをいふ安閑紀制禮以告成功拾四遠きあらぬたるあまのいたはりあり

いたはりあり　ラリルレ

惜ゲニナイサマ又ザウサモナイ又心配ノナイあどの意なり源初音此いたはりあるたるあるたふの衣いさうむ源松風何のいたはりもあくたてたるこことうふうあしくあぶりさまそ

いたはる　ラリルレ

あるれをかうるをいふなり宇俊蔭此奉る琴まくき所あるあしく引あうくて奉れとうさぶくいせんとの給へが源手習かうふりてあ藏人ふあしくあどしていたはり給ふ

いたはる　ラリルレ

勞はるる又タイセツニスルをいふなり

他ふイタハラレルをいふなり

文實七前好發初繕世賜不宮波去閏四月ふ作刹畢奴此申須中國議上のぎうるの所ふかくびやうのたらくんとのたまひて伊常の使よりい此人よくいた

そましとはひやれりけれバ[源桐壺]右のおとゞのいたはりかしづき給ふさまことなれ[落窪二]やうて蔵人少将あはせ奉りていたはり給ふ事かぎりなし[又二]いとどういたはらるゝにかゝりてありつるを是にことつけて捨んと思ひなりて

いたはる ラ リ ル レ

病にてなやむをいふ[宇条の使]いたはる所物し給ふとありけ給ける[又叢開下]かんなの月の夜がへふものいたはらるゝ所あるとありしが[又]嵯峨の院にてら菜参る事あるをあせでいとあしくなんあるべきいたはらるゝ事物し給ふなるをきゝんいとあがり申侍るをけしう物し給ふなるいかゞあらしかるらむ

○此二つのいたはらるゝは敬語なり

いたはること

病に煩ふをいふ[散木上]いたはることありてえまゐらぬよし申させたりけるが

いたび ○いたびぐら○いぬたぶ○きまんぢう○ちくそよ

蔓草なり葉木犀に似て厚く鋸歯なし深緑色互生也冬を經て凋まず地錦の蔓の如く木石に粘し花なくして葉間に實を生ず形天仙果の如く熟して黒く味甘し[安閑紀]物部木蓮子(木蓮子此云伊陀寐)[本和]木蓮子(和名以多比)[字]折傷木(伊太比一云木蓮子)

いたびき

とがきこたる板に絹をはりて強くして用ゐるをのなり一説にうるしぬりの板に絹に糊を付てはり付て能かはして引きはなせば光ありて蝋をぬりたるがごとしといへり[唯心院殿装束抄]裹云云引腰窠靈裹白(四字)板引也

いたひき(俗)

板を截解(ヒキトク)工なり

いたびさし

母屋につくりそへたる所をひさしといふ板にてつくれるを板びさしといふ[新古雑中]人すまぬふはの関屋の板びさしあれにし後はたゞ秋の風

いたぶ バ ビ ブ ベ

心のいたむまでかなしむこゝろの甚しきをいふなり[敏達紀]天皇聞之(キコシメシテ)傷惻(イタミタマフコト)極甚(ハナハダシ)

いたぶき

屋根を板にてふきたるをいふ[金葉連歌]かはらやの板ぶきにてもみゆるかなつちくれしてやつくりそめけん[今昔十三]板葺(イタブキ)の寝殿のつまに

いたぶらしき シク シキ シケ

あらきなみ又さわはげしきをいふなり[万十四]おしていなと稲はつかねどなみのほの伊多夫良思毛与きぞひとり寝て

いたぶる ブラ ブリ ブル ブレ

あらきなみをいふ又さわはげしきをいふ[万十三]風をいたみ甚振(イタブル)浪のあひだなく思ふきみはあひもふらんか

いたぶる（俗）ル リ ル レ ル

さまざまの事をいひうけて物をむさぼりとるをいふなり

いたぶらせる ゼ ズ セル セレ

他をして物をむさぼりとらするをいふ

いたぶらせる レル レル レ、

他ノ物をむさぼりとらるるをいふなり

いたべい べら（音）

家を遶る爲ノ板をもて作る屏垣なり

いたべし べゝ（音）

板表紙なり 摺帖の表ノ貼たる板をいふ

いたゞき

屋根の板のたゞきをいふ 拾遺 三 杉板もてふける板間のあはざらいいろふせんと

板間より月のもるをもろともにながめつゝ住べらけり

いたゞき（俗）

同ト

いたゞきもの

小児の戯なり 制作詳ならぬをいへども骨牌の類なるべし 新六四 をきなびとの春の

いたゞき シ シ キ

ある事をいたゞきのゝ

おぼえけまし

いたゞき シ シ キ

こゝをもとのこゝろ

よけまし

いたゞきつぐ

うたゝめさまのたゞ

月の影なり

いたゞきのかぜ

のあゝをもひ

こゝやも

不便ナサマ をいふなり 十訓九 主人の下知ノ

よりてあるべきたる事ゆゑ忽ノ命をうゝ

心ノ感ずるさまをいふなり 徒然草上

いたゞきうゝもるものゝ下戸なるゝぬ

板屋の軒の隙のつゞきたるをいふ 新六一

あぢゝのいたゞきつぐものなるゝ夜ノ

屋根の板間より漏るる風をいふ 榮 衣の珠

ふるさゝのいたゞきの風ノ夢さめてたノ

いたむ

疼痛をいふ

いたむの體言

いたむの體言哀傷をいふ

字 悼 伊太

いたを

[古今意四] 夫九 あら磯なる浦あまの塩やき風をいたみ青き月の日をいたみ扇の手風ぬるくもある哉

イタサニキツサニ の意なり [万十] 風緒痛のこぶる浪のあひだをくるしみ君が揖もふらんか

いたをいる 俗

とりふる意
なり

傷を入るの義なれど人の慇懃又物を惠まるるとくに分ち過たるに心を傷まむ

いたをれふる

心のいたみたるものをいふなり

字 悵 伊支度保賀又 伊太弥宇礼不

身體の痛て心よわくぬをいふなり [今昔六] 一人の女有り嬢妊して後十二月産まるる

いたむ マミムメ

身體のいたく思ふをいふなり [記上] 裸菟伏也云云其身皮悉風見吹拆痛苦泣伏者

いたをもむ マミムメ

事を不得身腫まして痛を悩む事無限

いたむ マミムメ

[神武紀] 時に五瀬命矢瘡痛甚

心の痛むゆゑ うめくむこと の甚しきをいふなり

いたもとをる セススレ

他をくるしめたまふをいふなり

いたもとむる メムムルムレ

同上

[神代紀上] 哀傷 [顯宗紀] 億計王側然歎曰 [續世繼] 有明の月の影も心をいたましむるいろ [万八十一] 日一夜もさうもへず賜こそ痛

いため

引割たる板の木理をいふ [世俗浅深秘抄] 下ヨ見ヨ

いためがい

革を水に漬して取出して鐵槌ゆて打たるをいふ [吉節] 撓皮

いためがを 俗

幾枚とかく糊して貼重ねたる紙なり

いためぶほ

焼物の類なり [枕異本十] 物に書てあるやうにめでぶ心えぬものなり いためぶほの葉ばかりたちまちの葉ばかりなり

いためぶほ [厨事類記] そのそばふたちまちの葉ばかりなり

いためおやく 青

木理の竪ふのうる木にて造るる物をいふ [世俗浅深秘抄] 以板目笏為善近代用満佐

支儒支最上寶物、皆板目也

いたあつける 俗 人を痛むる義なり 面其人の過を譴め又他の言を以て其事を調ととのふる

いたある 俗 油を以て菜蔬の硬を軟ゆ〜又魚肉等の鮮を殺をいふ 割烹の言なり ○爍

いたや 家根を板ふきたる家なり 枕六 ちひさき板屋の黒うきたるげなるぞ 源名 八月十五夜くもなき月うげひゆあるうけある小柴を大垣にして板屋とももたり〜 ひとありをめすあり

いたやくるまの屋形を板にてふきたる車なり 宇藤原君 内ふまるゝんとていたやくるの車の輪くけたるふせさうたるもう〜をとけて ちひさきためのこゝろをつけて

いたやぐひ ○のたらぐひ ○あたぐひ ○まやぐひ 分名其大き二三寸許一片い凹を一片い扇平ゆ〜と外面縦ゆ凹紋あり其殼を以て多く拍子を作ることを分拍子といふ 夫 あや〜〜そらめつら〜き板屋ゆひしまふく海士のおらもや ○半邊蚶

いたやら〜 いたい痛あり串い物を貫く物の惣名ゆて矢の體を穿ちて徹りたるをいふ 記中 於是與登美毘古戰之時五瀬命矢瘡痛甚 神武紀 時五瀬命於御手負登美毘古之痛矢串

いたらぐひ 俗 分名いたやぐひの下ゆ注ま

いたらぐひ 俗 分名きさぐひの下ゆ注ま

いたらぬ 俗 其處ゆ至らぬまて事ゆ熟せざるをいふ イクラヌ藝 イタラヌ人 ちすどいふ

いたらぬらるゝた らさうけるまと思ふふ

いたりある 刀川川川 おもひやりある又 智慧アル をもいふあり 大鏡五 此義懷の中納言の御出家惟成辨の ことそのそうのたりありける人ゆて今更ゆ よそ人すとまでらひ給ふもわと聞えさせけるに

いたりいたらぬ マデユキワタリタル といふ意なり 源紅葉賀 ひたる〜ぬらるゝき心まてまだおもひよ ひとしく至らぬをいふあり 古今春下 春の色のいたりいたらぬ里いあらしさけるさくら

いたりかゝる 刀川刀刀 才ありて物事ゆ行ふたりてさう深きをいふ 枕十 此中將ろけをとさのありいたり

かゝとゝ
しゝ

いたりきくあれ 名 汀 利

あまた方のことよるべうめる御心ゆいたる
あろくゝ浅きこのこゝろおろ〳〵

いたりつく 加 利 久 ケ

行きつゝをといふあり 源玉葛 かゝとゝふい
たりつきていまのてちるうあるうどを
おるもひや
りて

いたりねて 俗

のゝねとふ同じ 物称 東國あそぬきびと
ねと又いたりねとともいふ

いたりふかれ 名 汀 利

おもひやりの厚きをいふ又 智慧深キ をる
いふ 源帚木 心あきそを思ひめゝ〳〵さむゆも
あむをゝ〳〵うかたゞけ 又 横柱 こゝろはゞゝ
あるべき

いたる ラ リ ル レ

其をところ近行きつゝ又 ユキトヾク
をもいふあり

いたるまる ラ リ ル レ

万三 天地乃至流左右ニ 古今春上 初瀬おもうつるとおやゝうける人の家ゝ久〳〵
やどゝをやゝ久て後ゝいたりけもば 又秋下 仙宮ゝ菊をうけて人のいたるまる
かたをとよめる 又恋 まゝだ川のわたりて 土佐 守のたちよりよびゝ
文もて来ゝうよもゝていたりて 源帚 世ゝある事のおりめけ ゝたゝ〳〵ゝ
つけてむけゝのたゝ〳〵ぶ〳〵もあるむ 著二 汝必
大夫史ゝいたるべきものあり

いたる ラ リ ル レ

到るようにて化るとのふ意あり 常盤姫物語
朝ゝい世路ゝわゝをもどもタゝいゝをもて

なゝく白骨ゝ
いたる

いたるものを

及ぶものの意にて俗とあるべ 字 上ノ下 種
松ハ十六の大國ようちゝめてそゝさ國ゝ
いたるね

濱松四 あゝ〳〵ようゝ〳〵げゝ
ものをいたるゝどゝのたるゝめでたきを

宇 祭の使 ぬるをゝく掖井の清水手ゝらゝて
猶こそたのめ底いゝゝ彼ゝど

剛を抜きて鬪たる井をいふ 神樂譜 扨和
可々止乃伊多爲乃志美川佐止々保美

いち

人あわゝつどふ所をいふ又轉して萬物互に交易する所をいふ 万二 ものもこと

やちまたに出見〳〵輕市に商売もけり 新六六 よりあゝ あゝべ行くふ人も

いろをとめとあそぶ〳〵 以字 市

いち 音

數ひとつをいふ 万十六 一二の日のこゝろ

あゝぶに五六三四さへあうけり雙六のさえ

いち 音

學令 摠試三條通に爲第通に及全不通斟量決罰

拾芥抄下 九々云云二二四二二一

いち 音

何事うてもまづ第一の意をもてはじめとするとの

宇初秋上 たゞ今の琵琶の一は頭の少將なり

えべめもと 又藤原君 ふゝをと一ゆてよりむ 枕五 もべて人は一ゆもてわぶこは更に

何ゆうせん 又九 除目にその年の一の國えたる人のよろこびなりとのひて

我意を張り通さをのふ イヂカ、ル イヂラハル

ゆとりのふ 大鏡五 心のぢゆてあらせ〳〵殿のゝ

いぢ 音

さぞろ〳〵あらせ〳〵ふ猶ゆたさふ

まゆうして申させ給ひ〳〵うど、

いち〳〵 音

ひとつ〳〵又ひとつ〳〵又一度々々の意あり

太政官式 宸儀御殿之後一々供奉 大學式

隨召昇殿一々論義 正親式 座定執簿一々喚名 榮若菜 きのふの宮の大饗のゝ

あり〳〵とひ聞えさせ給へば はべ〳〵ゆうあらべとのちの〳〵ふ申させ給へば

雲圖抄 弓場始次第次所掌一々唱名 梅松論 敵没落のこと

せめロに捨置、籏百餘流持參せ一々御披見有〳〵べ

いちらふ 音

注いらふの下にあり 江次二 頗乾向

先一揮次一揮 名目一揮

いちう 音

ひとつの家をいふ但〳〵殿舍寺院等をも

巫皆給屋一宇 大藏式 立五丈紺幄 臨時祭式 神殿各一宇 又 其新任御

梅松論 六十六箇國に寺一宇づゝ建立〳〵 運歩一宇

いちゐう 音

意中にあることの

うちの義あり

いぢゐう 音

此より儀へ移り住むをいふ移住の

音なり 慶節 移住

いちえう 音

太刀又刀袴のるゐ腰に帶るものをいふ

袴一腰 運歩一腰 太刀 四時祭式上 表裙一腰 又 輦籠一腰 圖書式

慶節一腰 太刀

いちえふ 音

小さき舟をいふ うゝべるもの一葉に似

舟にさをさゝて、万里のさゝひに 平家十 さるの御前より一えの

うゝび給ふ ひに

いちえふらん（俗）深山に生ずる小草すべて一莖一葉を出だし葉形擔圓にしてたるのほくさの如し其上に一花を開く蘭花に似て小なり一説蘭の義なり

いちえん（音）人の家ひとつをいふ 諸陵式 陵戸一烟

いちおく（音）數にいふ万万なり ○一億

いちがい（音）一時に事をなすをいふ升斗の擔なして上を拂ひ平らかなるとり出だす語なり ○一槩 毛ひとすぢなりをいふ ○一毫

いちがう（音）度にいふ釐と十に分ちたるひとつなり 十絲なり ○一毫

いちがう（音）一郷をいふ 清行意見封事 天智天皇爲皇太子攝政從行路宿下道郡見一郷戸邑甚盛得勝兵二萬人

天皇下詔試徵此郷軍士即得勝兵二萬人天皇大悅名此邑曰二萬郷

いちがふ（音）量にいふ一勺を十合せたるなり 雜令 量十合爲外二百爲斛十斗爲斛 拾芥抄下 十夕爲合

いちがふ（音）内膳式中荷水桶一合 雅楽寮式 ちりのはと二合

いちがふゆるまで（音）一合を容る量なり木厚三分五釐内方二寸一分深一寸四分五釐實積六千四百八十二水外に厚四分寸積同じ

いちがん（音）眼のひとつをいふ 運歩 一眼

いちぎ（音）ひとつの義をいふ義いことなり 梅松論 御むろひあるべき曹をなき弓をもて頭をのべて參るべしと是まで一義なりよあるべき

いちぎやう（音）ひとつにいふ例なるをいふ 掃部式 南舍敷座二行前一行爲辨官并諸司五位已上座

いちぎやう（音）書のひとくだりをいふ 雜式 其字令分明不得一行過十三四箇字

いちく（音）もとべて一具をなしたるものをいふ 主殿式 上革短甲冑一具 兵庫式 造弩一具單切六百

三十三人宇國華内侍のすけ〻そびろ〻一具、よるの
さうぞく一具きらぬ三十ひきとろろ物とのもてとろも給ふ、

いちぐう（音）　ひと隅をいふ
慶節一隅

草名、まん稚んぐきの
雌種なり

いちぐさ（俗）

いちぐさ〜うけ　いちぐ（音）

のちぐゆうけの下ゐ注也　高忠聞書　上様御
主の山ゑと御出候ときい御ろんぢゐまん
どう三つ添べ〜〻一具指懸を添べ〜、指うけとゞ一具と
いちぐさ〜うけといろぬなり、

いちぐん（音）　ひとところをいふ　大堂會式一郡
調布、中男作物、

いちぐゆうけ　いちぐ（音）　○いちぐさ〜うけ
左右の手ゐ拭る革の韈あり軍ゐ用ゐる
なり　高忠聞書　一具ゆうげさ〜と貴人の前へ
出る事あ〜ゞ左ゆうげ両方ゆうげ〜
とりて出べ〜

いちぐら　商人のあきなひする所なり
和肆和名伊久良諸市毎肆立標題

いちぐらもちのさい（音）　潔齋の一月あるをいふ　神祇令　凡一月齋
爲大祀三日齋爲中祀一日齋爲小祀

いちぐるまん（音）　書畫あるの巻物ゐいふ　圖書式一巻
用紙、七百一十張、

いちぐるまん（音）　筆笛あるゐいふ
圖書式筆一管

いちげ（音）　一隻の字音あり四月十五日より七月十五日
まで一隻九旬とのふ釋氏要覽ゐ詳なり

夏ハ道路ゐむ〜けら多けもゞ是とふこころさゞ〜とそ安居とそ〜ゞちこる
りて居るなり　謡曲通小町　是ハ八瀬の山里ゐ一隻と送る僧ゐ〻候

いちげい（音）　何事ゐよる〜ゞ一の技をいふ　兵部式下便
可勝者一藝之有名者、　翌一藝同與上考、　類聚往来　殊以才能之
無不登用

いちげきう（俗）　草名、まん稚んぐきの雄種と稱する
大あるものまんねんぐきの下ゐ注也

いちげきう（俗）　草名、のんゆきの
下ゐ注也

いちげさう（俗）　草名、のちまんさうの
下ゐ注也

いちげつ（音）○ひとつき　ひとつきゐあるゞ〜○一月
太神宮式前一月晦日夜除

いちげんきん（音）○はちまごと　一絃を張る琴なり　後紀八　後頗習中國語自謂天竺人常彈一弦琴歌聲哀楚

いちこ（俗）○あづさこと○くちよせ　人の魂を招寄せる巫女なり
○たくさこと○あるひ

いちご○いちびこ○らさのちご○やぶのちご○はせのちご
○らりんせのちご○やセのちご○そばのちご○あぐいちご
諸國路傍ゆ生ずる苺多〳〵三月枝の梢ゆ白花を開く五出實蛇苺ゆ似て深緑葉の形茶蘼葉ゆ似て深緑あり人莖葉毛刺うつ〳〵きちごめいちごらひたる赤染衛門集いちごを
るりごゆのまてわるべ〳〵人本和蓬蘿細故以生涯をいふ徒然草大やう人をそるゆまとし心あるきはゆ皆此あ〳〵ゆてぞ一期ゆ

いちご（音）
まてぐめる
運歩一期イチゴ

いちごう（音）　一二の序を以て物の契とせる
その第一をいふ○一號

いちこく（音）　量ゆいふ一斗を十合せたるをいふ○斛又石宇國讃下大殿右大將殿のうゆのもうまで
とう〳〵と奉る大殿ゆいまをを廿ようね三石云々大將三條殿ゆようね一石
ことまをを二ゆ奉る雑令量十合爲外十外爲斗十斗爲斛

いちごき〳〵　伊豫（俗）　草名ちやひきぐさの下ゆ注也

いちごき〳〵　備後（俗）　草名めひぐはの下ゆ注也

いちごちごう（音）　十二調子の一なり○一越調源業上いちごちごうのこゑゆはちのをそたて

いちごつなぎ　長崎（俗）○そるをそる　草名葉形をそめうたびゆ似て高さ尺餘其穂細小すゝを堅〳〵
○ゆらをぐさ

いちごのはぢ　いちを（音）　一生の恥といふ意なり北條早雲井簡條虚言を申べ〳〵をを人ゆ紀さるもてを一期の

いちごまるを（俗）　木名やうゆ〳〵きぐの下ゆ注也

いちごん（音）　ひと言をいふ太平六本間ゆ子息源内兵衛もをけたるゆ〳〵めようの有様を語る資忠
父ゆ首を一目みて一言をも出さもをひをめたりけるゆ

いちごんそんく（音）　一詞半句まて一言又そのかゝれの意なり北條早雲井簡條上下萬民ゆ對〳〵一詞半

句すてゝ虚言を申べゝゝゝぞ

いちごゝろゝ 俗

雜藿を擦〻酢を以て拌肉をあへたるもの狀蓬蘿子の如〻故ゆゝふ

上座とゝゝふ 字拾十三 諸僧一座より次第ゆ鉢をゝゝぞ物をゝく

同座をゝるゝゝふ

いちざ 音

講釋あど一席のゝゝゝふ

いちざ 音

種々合せて制〻たる藥をゝゝふ 齋宮式 呉茱萸丸、芍藥丸、温白丸、各一劑 典藥式 白散一劑、度嶂散一劑 屠蘇散一劑

いちさゝゝ

居氣 懐 被 惠祢

注下ゆあり 神武紀 字破奈利餓那居波佐磨、伊智佐分幾、未迺於朋鷄句塢

いちさゝゝ 枕詞

記中 伊知佐迦紀微能意冨祢久表〇いちさゝゝゝ和名抄ゆ拎 佐木とあるものゝて

今俗毘都加紀と呼是なり赤黒く紫たゝたる實の多く成るものゝ故ゆ多けくの枕詞とゝゝたり

いちざのせんゝ 音

第一の座ゆ著座まぐき宜旨をゝゝふ 職原抄上 孰柄者必蒙一座之宜旨 皇代紀抄 高倉院承安四年仁和寺覺忠僧正、蒙一座宣旨

いちゝ 音

文字ひゝゝゝをゝゝふ〇一字 左右京式 九錢文以一字明皆令通用

いちゝ 音

一事とゝゝふ義なりてひゝゝゝゝをゝゝふ 宮衛令 凡儀仗軍器、十事以上、出入諸門者皆

責榜 鞭弓一張 箭五 隻各爲一事

いちゝ 音

ひゝゝゝゝをゝゝふ一時の字音なり〇一時

いちゝ 音

時刻ゆゝふ一晝夜を廿四ゆゝゝゝて、そのひゝゝゝを一字とゝゝふ日中よりうぞ人ゝゝ半より

めて夜半ゆ至りて十二字、夜半ゆ日中ゆゝゝゝて又十二字なり

いちゝせんきん 音

人の書を賞〻て一字千金ゆ直るゝとゝゝふ意なり 雲州消息 一字千金德馨難忘

類聚文集 一字千金

いちしのはな いちごなりといひ羊蹄の花なりといふ 夫木抄に木の部に入れたるはいちごを小木なりとして擧たるなるべし 万上 路のべの壹師の花のいちじろくひとみなしりぬ我こひづまは 仙覺抄七 いちしのはなといへるはいちごの花なり 夫廿九 逸師 たゞ民を衣手寒し道のべのいちしの花の色にまがへて

いちじふ 音 數にいふ十といふにおなじ 大學式 賞錢云云一十貫 假寧令 凡壹拾參條

いちじん 音 天皇を申奉るなり いちにんといふべきをいちじんとよむは凡人に差別して申なり 職員令 大政大臣一人 右師範一人 儀形四海 中家實録 一人辭鎗奉稱王上 名目 一人 イチジン

いちじゆく 俗 ○いちじく○うどんげ ○いぬたうがき 果名 高さ丈餘 構葉に似て厚大 糙澀あり 五月葉間に實を生ず 木饅頭に似たり 大さ一寸許 初緑熟して紫色 内紅にして白色の細子あり 味至て甘し ○無花果

いちじゆく 俗 木名 いぬびはの下に注せ

いちじゆん 音 ひとめぐりをいふ 雲圖抄 最勝講事云云 又禮盤を御帳の方へ進て立之 但如此一巡 平等ニ一巡之為ニ佳説ト 運歩 一巡 イチジユン

いちじようのり いちじよう 音 一乘の字音にて法花をいふ 枕五 すべて人に一におもはれずば更に何かせん只いみじうなかなかにくまれあしうせられてあらん 二三にては死ぬともあらじ 一にてをあらんなどいへば一乘の法なりと人々わらふ

いちじるし ク シ キ 事物のきはやかにしるきをいふ いちじろしと同言なり

いちじるゝる ラ リ ル レ きはやかにあらはれてあるをいふなり 蜻上 いちじるき山ぐちならばこゝながら神のけしきを見せよとぞおもふ 長能集 いのりつるしるし神の心なるいちじるく昔の人にあへるけふかな 枕八 例の所などにてこゝに又いちじるからぬ人のこゑきこえつけたるこそ ひとよりすゞしの其ぶ人なりとかふきまでにつぶやくなるも

いちぜん 音 食物を居る臺にいふ 運歩 一膳 ゼイゼン

いちぜんめし 俗 一椀を以て價を定めたるもの賤人の食なり

いちぞく 音
綸旨を給たり〳〵ふ千劔破より虚病して本國へ歸り便宜の一族たちを潛ふ集めて謀叛の計畧をぞ被回ける
小野宮一族云云九條殿一族太平記先朝〳〵ゆゑ一家親族をいふ 雲圖抄

いちぞん 俗
一人の事をいふ

いちだ 音
馬一匹ふ負つもる物ふいふ 主税式上 九一駄
荷率絹七十匹絲三百絇綿三百屯調布卅端庸布卅段商布五十段銅一百斤鐵卅廷鍬七十口 雜式九公私運米五斗爲俵仍以三俵爲駄自餘雜物亦准此 運歩一駄〇近世の定めの本馬一匹一駄三十六貫目輕尻一駄十八貫目ゑり

いちだい 音
天皇ゆい位ふ〳〵ゆゑ世間をいひ九人の家をつぎたる間をいふ 圖書式右一代一講
仁王會 更科日記 さるべき人々一代ふ一度の見ものゆゑ 梅松論 御一代の内ふ又〳〵る事ハいろ〳〵ありけるゆゑ〳〵〳〵

いちだい〳〵 音
一の大事の義ゑり容易ゑ〳〵ぐる事をいふ
太平記 楠ゆゑ〳〵ゆゑ此一大事をゑゆゑひ立候事ぐらぶんと〳〵〳〵ぐるふ似ゑり、 慶節 一大事
不肖の身と〳〵て對面して申けるハ正成

いちだう 音
五畿七道のその一ゑりその道ふ屬せる國々を合せて一道といふ 式部式下 引一道
國郡司進屯屏下

いちだう 音
ひゑろの藝能をいふ 雲圖抄 諸道明法
舉或取之 近代舉十餘人尤不穩也一道
不可過五六人歟、
〇一道

いちだん 音
ヒトキリ 又ひゑろの義ゑり 儀式二讀祝詞毎一段祝部称唯類聚往来可增
段之光彩侯

いちぢ
市路ゑり商人の互ふ有無を交易ゑる所をいふ
市とりふぢい路ゑり 万三 燒津べゑろぶ行
〜〜ゑ駿河ゑる阿倍の市道ふ
あひ〜兒らはも

いちつ 俗
書籍一つしを云ふ
一帙

いちだやう 音
度ふ〳〵ふ一尺と十合せたるゑり 雜令九度
十分爲寸十寸爲尺十尺爲丈 字後羅 この

やのりぬのもとのうたくふくく一丈ゆもるあるあり 枕十 櫻の一丈さくう
あてのうくーう咲たくるもくうまて 宇拾三 一丈さくう濱ゆあはあげらもぬ
物のひとつもなくゆさだまれるをいふ 宇拾五
その人の一定子とも聞えぬ人ありけり

いちぢやう 音
盛衰九 平家の榮給へば一定皇子ゆてぞ御座んと
雲圖抄 女房或二蓋或三蓋其貞數無二定

いちぢやう 音
物のひとつとさだまるをいふ
運歩 一重 棚 慶節 一重

いちづ 音
ひと道といふ意又ひとゆきといふ意ゆも
いふなり 慶節 一途

いちづく 俗
我意ゆ任せ勉めて爲終言ひ
終るをいふ

いちつぶり 土佐 俗
鳥名ゆゆどりの
下ゆ注也

いちでう 音
あらせ絲又帶被の類ゆいふ 四時祭式上 羅帶
一條 又下 被一條褶一條紐一條

いちでう 音
道路ゆいふ○一條 塵添壒囊抄上 風土記ゆ
山幾川幾と記也ゆ大道をば一條と注

いちでう 音
前の意より出て一の
事をいふ

いちでふ 音
雙紙又紙又ハ屏風一隻あるを一帖の意ゆ
いふ 内匠式 屏風一帖 源 繪合 かたいるまき
よき、一帖づつさしそゆふ浦々のあるさま、
さゆふゆふ見えたるを 運歩 一帖 紙

いちど 音
全地球一周を三百六十ゆ分ちたるその一を
いふ即ち二十八里八町十八間四尺三寸二分の
長さあり一度の六十分の一を一分といふ六十分の一を一秒といふ○一度

いちど 音
上の一度ゆ同じ北極星の地平上ゆ出る
高さゆいふ全地の中緯赤道下よりのぞめハ北極地平をそなうることと
一度ゆもめハ北極地平をそなうることと
地位を測るゆ用ゆて北極出地
何十何度といふ

いちど 音
驗温器晴雨針測液器あるゆ
いふ一度なり

いちど 音
ひとたびをいふなり 臨時祭式 拍手一度
梅松論 迚も一度ハ君の御爲ゆ命を奉るべし

いちとい 近江㊗
虫名かひこの下に注せ

いちどう㊍
ミなおなじきをといふ 主税式上 納官、封家一同割充之 平家ハ たづうに經をよミ念佛しても年廿一にてなうのさくへぞ入給ふにきやうだいきんぞく一どうをしミ給へどうひぞなき

いちどる いち㊍どる㊊
外國貨幣にいふ米利堅國の貨幣の名にて原名どるらるを略してどるとのミいふなり

いちなん㊍
ちじめに生まれたる男をいふ 江濃記 道三ハ子息新九郎が為にうたれける、たとへば道三に三子有り、一男新九郎義糺と云、是ハ先腹なり、二男孫四郎、三男喜平次と云、是ハ當腹なり

いちに㊍
一ッふたつを分て物を詳にせざるといふ 庭訓往来 万事物怱之間、不及一二

いちにち㊍
日の出るより入るまでをいふ又一晝夜をもいふなり 太政官式 前一日 少納言奏聞 又御法 一日一夜までも、
源 夢浮橋 一日の出家のくどくハかぎりなきものなれバいのちをしてこそ空しかるまじ侍るなれど

いちにちのさい㊍
一月齋の下に見ゆ

いちにちへんし㊍
一日片時の字音にて少しの間をいふ

いちにど㊍
一二度の字音なり 落窪三 風ひきてこゝちまうしきを一二度ハ聞過して 宇拾四 一二度

人屋に入らんだに入としてよめるべきことゝぞ

いちにん㊍
人ひとりをいふ○一人 宇俊蔭 山のあるじとりうげにの給ふあのまとハ天上よりきたり給ひし人の御子どもあり此山に下り給ひて七年まで給ひしおどろに一人をあてゝ七人のともがらとなりゆき

いちにん㊍
其職掌にある間をいふ 雜式 凡國司一任之内、不得所部交關

いちにんたうぜん㊍
壹人の勇士ハ千人にあたるの意なり 梅松論 師資よき馬得たり千騎万騎にもむかふべしとて亦かけ入ける體實に一人當千とぞ見えし
運歩 一人當千イチニンタウセン 古語一人以當千人

いちにんまへ㊗
諸藝術等の一人分習練したるものをいふ又衣服飲食等の一人分をもいふなり

いちねん㊍
十二ヶ月の間をいふ 臨時祭式 又齋後一年更入朝奏神壽詞、

いちねん 音

とぢめは一念のうらめ〜きゆゑこそ長き夜のやをあかすとぶらひつるひいりたるこころをいふ 源 横笛

この世ゆゑ數は思ひのまぬこと〜ゆゑの今はの

いちのう 音

藝術一つは達せるといふ

○一能

いちのうるき いち 音

東西両市は殖とある樹木といふ 万三 東の市之殖木の木だちのごとあらそひさ〜をうべこひふけり

いちのかど いち 音

市場はあるところの門あり 拾遺 哀傷 市の門はるきろけと待ける

いちのかれあ いち 音

料理の詞なり もてめはきるなどをいふ

いちのかを いち 音

左大臣をいふあり 職原抄 官中事一向左大臣統領之故云一上 關白之人爲左大臣

時右大臣行二上事一

是依關白與奪也

いちのかを いち 音

東西の市を司る司の正あり いちのつかさの條見合せべし 官位令 東西市正

いちのきさき いち 音

後宮ゆゑ一の意あり 即皇后を申せ 濱松二 一の后の父一の大臣

いちのくら いち 音

第一はあたりたる戸ぐちをいふ 枕八 この三月あそびの一の口は殿上あるべたり

しをとやう〜はべ

うせあどこ〜と

いちのくふ いち 音

縣召の除目の時第一の好き國は任じくるをいふ 枕九 まだり顔なる除目は其年の一の國えたる人のよろこびあるとの人なり給へり あとのふ人の

いちのくるま いち 音

多くの中ゆてよろ〜しき車をいふ 枕十二 御車ぐるまは十五、四つの尼車、一の御車は

かくの車

あり

いちのざえ 音

習得たることぐさのうちは第一なるをいふ 源 繪合 きんひらせ給ふ事あん一のざえあて

いちだゆい横笛、びんさうのこと 狭一 ことよりの宴はいさゝらふ限りの人

一の拍と手のぐさりをゝ〜まで

いちの〜 音

史の中は上座なる人をいふ

太政官式 一史進執硯筥

いちのあそうけい 音

雲圖抄 一上卿自召職事、
進出名目 一上卿

上卿の中に上座なる人をいふ、上卿とは、其日の取あつかひをせる人の名目なり

いちのたい 音

くらゐもとに立てと給へば、左大将おもてに、
東の一のたいのくらゐおもてに 運歩 一対

一の對屋といふ對屋とは母屋をむかひ
合たるなり 宇図藻下 おんでんにむかひたる

いちのだい 音

最初のだいに食物の臺をいふ 雲圖抄 藏人、
頭爲陪膳 先取一御臺 居御箸一雙、進出

左大臣をいふなり 拾芥抄中 一大臣、
宿所 在宜陽殿 東院

いちのだいごん 音

第一の大納言の義なり 江次二 公卿等參集、
一大納言来 狭四 此比一の大納言なり

いちのだうし 音

十二月禁中の佛名の時、集合の中に、一番に
あたる導師をいふ 雲圖抄 次堂導師

着座 院南第一間、僧座北頭、跪取花筥授導師、導師授他僧、裏僧、上臈授一導師、暫居後下臈授他僧

いちのたうら 音

第一にあるべき寶をいふなり 宇拾十四
あやつり波風にあひぬるとき船の中に一の

寶とあつもふ物を
海に入るるに

いちのたから 音

枕五 あまんにさぶらふ物は琴も笛もなる
めづらしき名つきてこそあるべけれ
いとことごとしき頭の中將こそ給ひしか

いちのつかさ

市の高き處をいふ野づかさ、一のつかさ
などのつかさに同じ 記下 夜廳登能詐能多

氣知爾古陀加流、伊知能
都加佐爾比那閇夜爾、

いちのつかさ

市司あり東西の両司あり 職員令 東市司、
西市司准此 正一人掌財貨交易器物真偽

度量輕重賣買估價、
禁察非違事

いちのてだて 音

第一の謀略をいふなり 梅松論 凡敵の大
勢に相向ふと云ふ御方小勢なる川を後に
橋をきりて武畧の一の手だてなり 謀に舟をもきり

いちのところ 音

攝政關白をいふなり 枕八 男にいとをしう
思はれたる女一の所に時めく人もえあらず

くゐゐゐ稱と 職原抄 執柄者必蒙二座之宣旨
故稱二人又云一所

いちのとりゐ 俗

神社の前ゐれてゐる第一の
鳥居をいふ

いちのゐい 音

ゐゐ〜内侍の中ゐ上座ゐる人をいふ
禁秘抄下 掌侍六人自正四人權二人上古有之 此内以一内
侍爲勾當隨補也

いちのねぎ いち 音

續後神祇 大神宮の一稱宜ゐて、年ひさ〜〜
ゐゐ〜称宜の中ゐ上座ゐる人をいふ
つゐくゐゐる事をゐるひてよめる 東二 大神宮奉幣御使歸參
二宮一稱宜各領納幣物可抽懇祈之由内々申之

いちのは〜 いち 音

神社の前ゐうけれる第一の橋をいふ
枕七 上の御社の一の橋

いちのはぶ〜 いち 音

羽節ゐ鳥の羽のそえれる節ゐ云 武家調味故實
白鳥切の支一の羽ふ〜より次第ゐつゐて
ゐゐ〜稱三ゐ可切さてゐゐ事如鷹也

いちのひと いち 音

攝政關白をいふ 榮花會 かゐ〜さゐ〜とめて
たゐ〜世のゐゐめとゐ〜せ給ふべき一の人

たちのてゐゐ〜ゐ〜けゐるものを 枕五 めてたきもの一の人の御おりも
職原抄 執柄者必蒙二座之宣旨故稱二人

いちのひを いち 音

料理の詞ゐて魚のひをぎゐいの肉をいふ
齊大のひをを可用飯の時一の
用ゐ〜、但貴人の支ゐり 四條流庖丁書 鯛鯉以下鱠を可盛支御肴ゐ

いちのま いち 音

間い殿舍の間ゐとその第一の間をいふ
雲圖抄 皇后宮入内時童女居二間

いちのまひ いち 音

舞の内の最初ゐる舞をいふ 大鏡八 ゐひ
ゐひいこの關白君ゐこそい舞せ給ひ〜ゐ 枕七 一の舞のとうるゐ〜〜
袖をゐるせてゐゐりもり出て西ゐむゐひて立ぬ、

いちのこと いち 音

ちめゐ生も給ふ男宮を申第一の皇子
なり 源桐壺 一のこと古大臣の女御の御腹
よて 梅松論 關東より君をゐゐと奉る間、御在位の事ゐ
一の御子後深草院二の御子龜山院の両御子孫

いちのこゑ

市中の溝ゐり 散木下 數ゐ〜ぬ我身い市の
こゑゐもゐ行ゐふ人のこえゐるけゐ

いちのこや いち 音

ちめゐ生も給へる男宮を申也 宇嵯峨院
藤つゐりの一の宮こそい七もぞさ〜ゐたゐの

人とゝ見えたるもの枕五めでたき
物、今上一の宮

いちのみや いち音

一の宮い諸國ゐありてその國第一の宮をいふ
二宮三宮四宮五宮六宮などの名ことゝもゝ
讃岐國一宮も、

残もり相州兵亂記備中國吉津宮
彼神の御子也、當社も又其神の御子とゝや

いちのもの いち音

ぬけいでたる人とのゝふ意なり源若菜上ふ
るき代の一の物と名あるうぎうへゝなつ

どゝひ參る御賀ゐ
ゐんあめる

いちのもん いちもん音

神社又寺などゐ第一ゐ
たてる門をいふ

いちのや いち音

最初ゐ射る矢をいふ左兵衛式歩射四十六
歩十箭中的四已上者、及第、若一箭不中皮
者、以二的准折、盛衰サ三佐殿不安思給ける唯一人留と一の矢番て
射給へゝ弓手の草摺ゐ縫樣ゐ射込もたり

いちらい 音

ひとたゝねをいふなり大膳式下蘿蔔萵
苣各一把運歩一把イチハメル義なり慶節一把

いちは 音

稲一束の十分の一をいふ太神宮式小稅
云云一把拾芥抄下十分爲把

いちらい 音

鳥ひとりをいふひゝらいの
下ゐ注也

いちば

市場なり商人の交易をする場なり拾遺雜意
まどろゝのひちばまたてるひとりまの

いちばい 音

あもてやゝゝるん物ゐ
やへあゝぬ

一の物の二つゐるゐて一升の二升ゐ
なり一斤の二斤ゐある類なり雜令元以稻

栗出舉者、任依私契不爲理以二年爲斷謂春時舉受以秋
不得過一倍其官半倍セヨ報是爲一年也

いちはち 音 ○いちはつ

草名、こやまとらさの下ゐ注也御湯殿日記
永祿六年九月あもりわもり一八ゐある古節一八ゐ

いちばん 音

ひとつがひをいふ又一組の意なり大舍人式
凡車駕行幸者舍人四番爲一番式枕七人の
るゝ〳〵あのせ〳〵けゝる所ゐ云々左の一番いおのれのはんさおもひ給へゝゝ
たのむゐゐ又ハたのもしげゐき物云云一番ゐうゝ雙六

いちばん 音

真先といふ意なり大學式三其貢進之次、以
左近爲一番太平六明日の合戰ゐさ允げけ
して一番ゐ討死して其名を
末代ゐのこさんと存ぜる

いちばんくろせん 音

最初の戰ひをいふ 太閤記六 一番合戰をバ吾々のたゝ〳〵候ちんとあゝ返〳〵云〳〵うども戰陣ハ是〳〵第一番ハとりたる首級をいふ 房總治亂記 今日万喜方へ討捕首九十三級

いちばんらび いちばん 音

火の子坂よて實撿ハ一番首ハ東平源五郎也時ハ十七歳

いちばんす 俗

醯醋をいふ ○頭醋

いちばんでるのく いちばん 音

第一番ハ備立たる戰隊をいふ 江濃記 今度もまづ一戰仕り其上の儀ハ〳〵〳〵とて先一番備ハ巻村野村二千騎二番道永平左衛門

いちばんて いちばん 音

戰陣ハ〳〵第一番ハ出る隊をいふ二番手三番手等あり 小松軍記 透間もなく攻付らるぬけくゝ〳〵ものどもい

いちばんで〳〵 俗

高弟をいふ一の弟子の義あり

いちばんどり いちばん 音

明方最初ハなく鷄をいふ 蒲生氏鄕記 明日十九日一番鷄ハ打立と申ふれ候へとも

いちばんのり いちばん 音

戰場ゐて敵の城柵中へ最初ハ乘入るをいふ○先登

いちばんやり いちばん 音

戰場ゐて最初ハ進ミて鑓を入るゝをいふ 太閤記六 謁粉骨合於一番鑓突退群雄

柴田退治記 今度柳ヶ瀬表秀吉所切崩之一番鑓者悉近習之輩也

いちはやき クヒ キ

宇拾三 其頃熱田神いちはやゝ〳〵おはゝ〳〵まして云云無禮をいたすものをばやがてたちどころハ罰せきせあゝ〳〵ハ〳〵けもゝ○又心そゝしき又あり 靖下 家ハ〳〵へりてうちねたるやどりハ門のいちはやき入るそ心のうちハ舞のをゝるをおそゝ〳〵とぞおもひ給ひける○又ゐんゝ〳〵ける 盛衰十五 世をとる人の子とゝひあゝ〳〵いちはやゝ〳〵ぞおゝ〳〵 盛衰十七 天性入道ハ善事ゆも惡事ゆも前後をゝくへりこそいちはやき人ゝそ心のうちハ舞のをゝるをおそゝ〳〵とぞおもひ給ひける○又 伊 むゝ〳〵人ハゝ〳〵いちはやきこゝやゝびを

いちはやぶる ヒ フル フル

いちハ稜威ハはやく速ゐて烈く猛き勢ひをいふびハ其狀をいふ辭ゐてちはやぶるとハ 祝詞式鎮魂祭 依此氏 揮辭竟奉者

洞意ゐり勢のあゝくまそゝむさゐをとゝふ皇御孫能朝廷ハ御心一速比給波志爲氏

いちばる 俗

我がゐるもふこころろを強ていひつのり
又爲つのるをいふ

いちひ ○いちびゞ
○いちひのき

其木櫧ゐ似て同類異物あり、葉うゝゐ似て
麪櫧より薄く大あり、高二三丈、實又櫧ゐ
似たり、木材堅くゝして舟の櫓ゐ作るべゝ ○石櫧 用明紀 赤檮 此云伊知比

和 櫟子 和名抄 駁以 相似而大於推子者也

いちび ○ごさいは ○かあびき ○ちあのを 一年生の草まゝて、其葉桐の如く周
○いちぶ ○きりあさ ○いちびの 邊雲頭狀をあゝ軟薄まゝて毛あり
互生まを夏月五瓣の黃花を開く實扁莢を環狀ゐ連ねて圓形をなまを、古
此草の皮を剥き、脛巾とまを今も縄を搓るゐ用ゐる所あり ○苘麻 儀式三
其脛巾菲 私設之

本和 菡實 和名抄 以比

いちび 俗 ○いちぶ ○ちあのを 一年生の草まゝて海邊の國まを多く栽る
○つあを ○ちあびきを 皮を剥て舩の索とまを高三五尺葉い朴樹ゐ
似て長くゝて尖う本ゐ二の鬚の如きものあり花苘麻ゐ似て小く實い
無花果の小あるが如ゝ 種子い胡麻ゐ似て小く扁ゝ ○黃麻

いちひがゝ 俗 木名、いちびの
下ゐ注まを

いちびがら 俗 ○いちびらがら 苘麻の幹あり燒て炭とゝて
○ゆくち 火口ゐ用ゐるあり

いちびと

草名、いちびの下ゐ注まを

雄略紀 蓬蒿 此云伊致蘇姑

いちびと

あきびゝとゐあゐ

和 市郭兒 伊知比止一云、市人

いちびはき

苘麻の皮ゐて造まる脛巾めて衛府及從
者などの服ゐあり 儀式三 其脛巾菲 私設之

和 苘 和名、伊知比、今俗編ず苘爲行纏

いちひめのこと

市を守る神とゐう 天卅 市姫の神のいとこの
いちまあるまゐ物ゐ千代をつむゝん
史生をいゝふ公廨の一分を給まるゐあり

いちぶ 音

職原抄上 史生
謂之一分

太政官式 凡諸國一分已上遷任他國

多少ゐ限らまを書籍の全部をいゝふ 延喜式序
併省兩式削成一部 圖書式 金字最勝王經
一部 源 若菜下 日ごとゐ法華經一部
供養せさせ給ふ

いちぶ 音

金貨ゐいゝふ、銀六十匁即金一兩を四つゐ
割たる一つ拾五匁ゐ

いちぶ 音

物の重さをはかる詞、一銖を六つあてたるをいふ是大一両を四つにわりたる數分爲一両 薫集類抄 六朱を

一分とも七四分と一両とも

度わりふ一寸を十にわりたるものひとつあり 令義解 凡度十分爲寸云云分者北方

いちぶ 音

秬黍中者一之廣爲分

銭一文を十にわりたるをいふ

いちぶ 音

草名、蔄麻の下に注せ

いちぶ 俗

草名、黄麻の下に注せ

いちぶ 俗

書籍の一部始終より出て事のはじめをいふ

いちぶつ ぶつ 俗

一佛浄土の音なりとある也 ぶ〻 一つの佛世界にふうあ也合たりといふあり

いちぶつ ぶつ どう 音

落窪 衛門少納言一佛濁土にふうたるあやまりなんとあるべし

いちぶめ〜 いちぶ 音

式部省にて諸國の史生を任ずる名をいふ 職原抄上 毎年於本省行諸國一分召也一分召者任諸國史生之名也

いちべい 俗

草名、蔄麻の下に注せ

いちべいぐら 俗

いちびぐらの下に注せ

いちべいふ 音

人に一たび別をその後このうをいふ 〇一別以来

いちべたん 俗

鉛粉を取たる滓を再び焼て鉛丹とするものなり下品なり方今少し

いちまい 音

貨幣の金銀にいふ金の一枚に七両二分を一枚の銀の一枚に四拾三匁をいふ

いちまい 音

ひらなるものなるものをいふ 四時祭式上 五色衣綿一百枚五色王二百枚 又 楯一枚 又 箕一枚 又 掾一枚 又 小刀子一枚 鉾一枚 又 菅笠一枚 又 龜甲一枚 太神宮式 玉串一枚

いちまいうんぞん 俗

特招牌に其名を掲る意なり多くの中の魁をいふ義なり 俳優より出たる名

いちまいだを 俗。たぶね
田中を引小舟あり農事に用ゐて秧又刈りたる稲を運ぶ 和漢三才圖會 划船 俗云ハ故槽

いちまいぼり 俗。すーきぼり
彫刻して彩色ある摺畫の一ひらづゝあるをいふ

いちまち
市と町とあり 落書露顯集 いちまちの説のごとくに

いちまつ 俗。ひーだこと
小方の並びたる文をいふ ひーだことはあるべし

いちまん 音
數ゐのふ千を十合せたるをいふ 太神宮式 給稲一万束 圖書式 一万三千佛像二鋪、多く藥名ゐのふひとし品とあるべし 古節 一味

いちみ 音
ひとつ味方ゐあるをいふ 江濃記 中比應仁亂の時六角方ハ山名一味、京極方細川

一味して両家不圖ゐ歛味方とあり

いちみどうきん 音
藏の御所へ押寄ける

とあるを一同ゐ合せるをいふ 相州兵亂記 二階堂の人々持朝の被官一味同心して大

いちみのあめ いちみ音
後拾 釋教 もろこしもふるの車ゐのりてとあるを佛の説法ゐたとふ 法華藥草喻品 佛王等説如一味雨 一味雨 又の名をいふ

いちみやう 音
○一名
女の商人をいふ はるゐのの類なり 宇 藤原君 とあるまちをいふ市女のとめくるあり 源 蜻蛉 中あて夫 廿三 まろゆきなる市女ゲ もてるうちめの〜色ふる〜のこと人をとひて

いちめい 音
ひとつのいのちをいふ 庭訓往来 奉二命一 被竭粉骨合戰者運歩一命 中心の凸字形なる漆笠をいふ 枕 八雨ふる日のいちめがさ日たりまるをとりのろんどりとあるを見て時房

いちめぐさ
散木下 いちふのいちめぐさ おわうろ〜 いちこまだいちめぐさをつたへ

いちめん 音
一つゝゐ〜あべたる義 相州兵亂記 射向の袖を差ぎ〜と一面ゐ切むらふ 城中の兵どもあどいふ 又 太田源六同源五郎同源四郎長南七郎 ものども一面ゐ打とるる

いちめん 音
鏡印又琴などの類ゐいふ 臨時祭式 鏡一面
内匠式 内印一面 雅楽式 和琴一面

いちめんしき 音
一面識の意にて一たび面を
合せたる交をいふ
人を惡ミ惱ませ又人を
弄ぶといふ

いちめる 俗
衡又貨幣ゐいふ一厘の十分の
一なり〇一毛

いちもう 音
度ゐいふ一毫ゐ
あたる

いちもう 音
碁のひとあをいふなり
運歩 一目 碁モク

いちもく 音
ひと目見たるをいふ
一目瞭然などいふ

いちもくもく 俗
圍碁にて出たる語にて弱き者い先ゐ一目を
置めゐゐ他を強きものにて其人を尊ミ

又轉じて人を畏まて
事を爲ものふ

いちもくきん 俗
いのぐさんゐ
同ト

いちもち 音
上人ほろきんだちよりそゝめて
のりたる馬いとうゝとも見えぐろうつもとどいそゝき逸物あり
けもの 駿牛繪詞 長き角のさゝうとうしろく曲りて角顔ありぐれき
牛の心もそゝれる逸物也 以字 逸物 牛馬也人也 運歩 逸物 鷹モチ

いちもつ 音
ひとつの物をいふなり
儀式十 毎賜一物 拍手

いちもん 音
一家をいひ又同姓の族をいふ 盛衰六 加之
國郡半ば一門の所領とあり 田園一家の進士
たり 承久軍物語 いろゐ高井どの御へんゐあるゝ一門の中まても
こゝもとうきあうだいのむつびをもとゝ申しゝゐたるもぞ

いちもん 音
ひとつの門をいふ 大嘗會式 其院
四面各開二門

いちもん 音
貨量ゐいふ孤が錢ひとつを
いふ〇一文

いちもんじ 音
穴山ゞ跡へ入違中筋真一文字ゐ切て還候 又 輝虎真一文字ゐ乘寄
蘆名家記 正宗の簇本ゐ伐て入らんと一文字ゐ進ミ寄る處ゐ

いちもんじ 音 懸幅の表襖紙中ハ近く上下ハある細き絹錦等をいふ 尺素往来 一文字

いちもんめ 俗 ○のろせん 衡ハかりいふ一貫を千ハ分けたるをいふ十分ある又貨幣ハいふ小判一両ハ銀六十目ハ當まゝそれを六十ハ分けたるそのひとつハあたる價をいふ一文目といふ

いちや 音 日のくれより明るまでをいふ 梅松論 彼城ハ押よせて一夜の中ハ攻落ま

いちやう 音 ひとつとさかゆくをいふ 運歩一様 慶節一様

いちやうらふ 音 一陽来復の字音あり 冬至をいふ

いちやく 音 ひとつの役をいふ 運歩一役 慶節一役

いちやくさう 俗 草名影天の下ハ注ま

いちやくさけ 俗 ○かぐそくきの○のあふひ○ふゆきさらしん○ゆきあかて○べづろふさうまあたごけ○かぐそきさう○きづろふさう○まそらん 葉二寸許楕圓深緑すゝて厚く莖四寸許冬を經て凋ます夏月別ハ莖を抽て六瓣の白花を開く大さ三四分又紫花のものあり ○鹿蹄草

いちやくさう 俗 草名影天の下ハ注ま

いちやづくり 俗 一夜ハて熟まるをいふ醸ハいふ

いちやゆとうろう 伊豫 草名まんあもあもあけの下ハ注ま

いちやぜんか 音 佛家ハいふ度名いちやあもんハあり 塵添壒嚢抄 八俱盧舎爲一踰繕那 上ハ同ト ○あもんハ限量と譯ま長さ高さ等をもいふハいふ梵語あり ○あもんの下ハ

いちやくもんん 音 注ま 神皇正統記 一由旬とハ四十里あり六尺を一歩とまた三百六十歩を一里とまた此里をもつて由旬を計る〳〵

いちよく 音 鳥のひとつとなるをいふ一羽ハ同ト 四時祭式上 羽一翼

いちらう 音 壹越調の楽曲あり 和壹弄 樂 ヨウ 暗 ヨウ

いちらーき 俗 ハ ハ 和 カイサウナ 又 氣ドクラシイ といふ意あり

いもらなを 音 矢を射て追ひちらしまとう 宇拾十二 射ちらさまそうけてのかけり

いもらふ 音 数年の功をつみたる人の意なり長たちくる人をいふもと僧徒の位次より出て俗人なもいふのわと近くあり侍うけるふ

いもらふ 新勅雑三 雲圖抄上 藤藏人藤藏人うとかうぶり有故障之時二三藤勤之 ひとたび見るあり 雲圖抄 除目之事云云 貫首一覽之後返給藏人

いもらん 音

いもり 音 土地を度るかいふ三十六町あり、處ふより下に五十町或い七十二町を一里とまをいふ

六町を一里とまをう今も此定を用ある處あり 拾芥抄中 自京陸奥際行程十五百八十里六町爲一里定

いもり 音 一の道理あるをいふ意あり

いもうう 音 ひとつの流義をいふ 庭訓往来 擢侍醫邉讀一流書籍

いもうぐさ 陸奥津輕 俗 佛甲草の雌種と稱まるふあるものよんねんぐさの下ふ注まを

いもうづらいもう 音 一里くの左右ふ土をたかくもうあげ樹をうゑてあるをいふ○猴子

武德編年集成 慶長九年二月四日 台德公東海東山北陸三道ふ一里塚を築しめ給ふ 天正ふ織田信長分國の中ふ一里塚を築しむ

いもうふ 音 ひとつぶをいふ

いもうふまんばい 音 慶節 一粒藥 一粒をうゑて万倍まる義まて多く稲ふいふ

いもうん 音 衡ふいふ一分を十ふ分たるをいふ十毫あり又銀の目ゆもいふ其定位あり

いもうん 音 度ふいふ一分を十ふ分けたるをいふ十毛あり

いもうん 音 稲一毫を十ふとけたるそのひとつをいふあり 拾芥抄下 十氂爲毫

いもうん 音 花ひとつをいふ 運歩 一輪花イチリン

いもうん 音 魚ひとつをいふ 後竹林院左府記 文明十一年九月九日鳥羽松千代鯉一鱗進上

いもうんさう 俗 ○いちげさう 草名高尺許葉風露草ふ似て三四月單辨白色の一花を開く狀梅花ふ似て大なり

いもうんさう 箱根 俗 草名うめがもちさうの下ふ注まを

いちりやう 音

るゆゝ四匁を一両とす〜まゝ四匁三分又四匁四分又五匁ともいふ 衡廿四銖爲一両 三両爲大両 一両 慶節 一両 藥金 雜令 權

衡ふいふ銖を廿四あつめたるあり方今の一両いはゆる〜の大一両あり又藥種あゝ量

いちりやう 音

貨幣ふいふ一銖を十六あつめたるゆゑて銀六十匁ふあたる通用金の名あり又銀の

一両とりゆゝ四匁三分をいふ

いちりやう 音

車ひとつをいふ 儀式 采女車

一輛 司人車一輛

いちりやう 音

裝束又甲冑の一具等ふいふ 四時祭式下 下

一領 四時祭式上 錦鞋一両 玄蕃式 襪一両

衣一領 太神宮式 襖子一領 大舎人式 挂甲

いちりやうるもり 音

ひとたびふたたびをいふ 雲圖抄 石清水臨時試樂 祭前日奏之或又止之

いちりやうはいふ同一 陸奥話記 雜人中一両人飲之無害而後合軍飲之皆呼萬歲

いちりやうゆん 音

一人二人をいふ 梅松論 親光ふ一族盃戸下野守家人一両輩召具して殘る勢と九

いちりやうはい 音

條遍ゆゝとゝめ置 庭訓往来 一両輩

いぢりる 音 ヲリルル

物ふ手を觸擺弄ぶをいふ轉じて人を惡ミ惱ませをいふ

いちるゐ 音

疎族の惣名あり 東 治承四年十二月廿二日石橋合戰後平家頻廻計議於源氏一類者悉以可

誅亡之由内々有用意

いちまい 音

ひとたびゐ禮をせるをいふ 運歩 一禮

いちまつ 音

ひとたびゐ並ぶをいふ 雲圖抄 公卿一列四位五位一列六位一列

いちまん 音

ひとつゝゐつゝ孫たるものをいふ 四時祭式上 篋一連 儀式 堅魚鰒各一連 慶節 一連 數珠

いちまんたくさいやう 音

一連託生の音なり念佛同行として彌陀稱號を唱ふるものをいふ 極樂國のひとつの蓮華ふうまれて人と共ふ善くも惡くもあるをいふ

いちろく 音

雙六ふ用ゐる語あり一と六の出たるさいの目をいふ 催馬樂 大井加名波女盤支五六

加戸之、伊知六乃左以也、四三左以也

いちろくまあうぶ（俗）　博奕よう出たる語よて勝負とる此一度ゐあり〳〵と危き事を決心〳〵て行ふをいふ

いちべゑころ〳〵（俗）　木名かい〳〵うつぎの下ゐ注也

いちこう（音）　ひとたび又ひ〳〵ことたうと　いふ意あり○一往

いちとん（音）　食物一杯を　いふ○一椀

いぢとる（俗）　いぢとるきの體言ゆて　意地惡き人をいふ

いぢとる記（俗）　こゝろのまゝきゆて物事を他ゐ　さゝ〳〵ひて爲るをいふあり

いちね（音）　一位なり諸王諸臣ゐ賜ふところの位階　ひとつのらね　あり古へゐ三位以上ゐ正従を分ち四位より

八位ゐ至て正従及び上下を分ち又大初位少初位ありて　各上下を分ちもべて三十階あり職員令

いちね　おらぐき○やまびゑ〳〵だん○きもらぶ〳〵　木名、樹の高丈餘葉樅榧の　○こねぢとり○をろこう○をんて　如く柔輭よ〳〵て繁茂也

豆の如き圓實を結び、熟〳〵て紅色、味甜〳〵、木材最上品よて木理就楠の如〳〵○水松雪玉集飛騨の國司よて基綱卿位山の一位の木を笏の料ゐのぐせ〳〵まて〳〵と記位山を祈近きゆで我こそ〳〵道をば君が手ゐとりて見よ深窓秘抄一位の笏位山の櫟也

いちゐん（音）　人ゐいふ一人とあるべし太神宮式大宮司一員云云少宮司一員玉藻兼久三年正月十一日今日二位少將拜賀云云一員魚先例、

いちぐん（音）　一圓の義よて惣體一向などいふゐあるべし建武式目次寺社一圓所領等事、且爲祈國家安全又禁裏仙洞御料所、寺社一圓、佛神領、殿下渡領等、

いちぐん（音）　新貨幣ゐいふ一錢を百あつはたるよて　即ち金の一兩銀の六十匁永錢の一貫文　ゐあたる　なり

語彙卷七